

## 「グローバル化時代と日本語」

ブルース・L・バートン

2003.2.14 放送

この頃、日本のメディアで日本語についての話題がよくとりあげられます。さまざまな見解が示されていますが、風潮としては、日本語や日本語が代表する日本の文化をより大切にしよう、という類いの意見が大半を占めるように思います。ところで日本語を大切にすることは、具体的にどういうことなのでしょう。今回はこの日本語をめぐる議論をヒントに、今日の日本と世界との関係について考えてみたいと思います。

新聞をご覧になった方もいるかと思いますが、去年の暮にかなり面白い記事が各紙の一面を飾りました。それは、国立国語研究所という有名なシンクタンクが、分かりにくい外来語をなるべく日本語に言い換えようという大胆な提案を公的に発表した、という内容でした。外来語に対する批判は、以前からありますが、今回の国立国語研究所の提案の特徴は、「この外来語の代わりにこの日本語を使いましょう」というふうに、具体的な言い換え語の例をたくさん示しているところにあると言えます。

ここで全部を紹介するわけにはいきませんが、たとえば、私が先程申し上げた「シンクタンク」という言葉が分かりにくいということで、国立国語研究所は代わりに「研究機関」または「調査機関」という日本語を使うように勧めています。他に若干の例を挙げると、たとえば、「アウトソーシング」という言葉の代わりに「外部委託」を、「オピニオンリーダー」の代わりに「世論指導者」を、そして医療用語の「インフォームド・コンセント」の代わりに「納得診療」を使うべきだとしています。他の言い換え例を見たい方は是非国立国語研究所のホーム・ページにアクセス、いや失礼、「接続」してみてください。(ちなみに「ホーム・ページ」という言葉はそのまま使っていていいそうです。)

実はブラックリストに入っている言葉のなかに、例えば「アイドルング・ストップ」など、外来語ではなく完全な和製英語もいくつか見受けられますが、ここで考えたいのは、個別の用語ではなく、より根本的な問題です。一体なぜこれだけのカタカナ語が日本語のなかに存在するのでしょうか。答えはずばり、日本人が使いたがるからです。ほとんどの場合、そもそも日本語にない発想が海外から入ってきたとき、外国語のままその名前や言葉を使いはじめます。そして、無理やり日本語に訳すよりそのまま使ったほうが楽だと判断する人が多いと、外来語として日本語の中にカタカナのまま残るといった経緯があります。

このように外来語はニーズがあるからこそ生き延びるわけですし、制限しようと思ってもおそろくうまくいかないでしょう。外来語の導入は、世界との壁を低くするという意味で、制限するどころか、逆に推進すべきだという議論すら成り立つだろうと思います。今や「ホーム・ページ」とか「アクセス」という言葉なしでは完全にやっていけない時代になっており、今後世界の共通化、一体化がさらに進んでいくと予測されますので、日本人はますます外来語、というよりも英語そのものを身に付ける必要があるように思います。

ところで視聴者のなかに、日本人が外来語や英語を覚えなければならないのは、そもそも不公平ではないか、とおっしゃりたい方もいると思います。この気持ちを最近分かりやすい形で表現してくれたのは、ノーベル化学賞を受賞された田中耕一さんです。一月上旬に大阪市内で行われた講演会で田中さんは、科学研究の成果を英語で発表しないと国際的に評価されない現状を「不公平」だと批判して、「日本語にしかない思考回路を大切に」すべきだという意見を述べました。新聞記事によると、田中さんは自分の研究成果について、「あの発見は試料をもったいないと思ったから生まれた。もったいない、は英語にない概念。日本語を捨て、日本語にしかない考え方を捨ててしまっはもったいない」という話をして会場を沸かせたそうです。

なかなか面白いエピソードであり、英語が実質的な共通語となっている国際社会で、日本人は損しているという田中さんの意見は、まさにその通りだと思います。ですが、同時にどうしようもない問題でもあるように思います。数百年前、イギリスやアメリカの人たちは、世界の舞台でフランス語を使わざるを得なかったことに対してきつと同じような不満を抱いていたでしょうし、さらに昔は、ヨーロッパ各地の人たちはラテン語に対しても同じようなコンプレックスがあったに違いないでしょう。これらの例からも分かりますように、その時その時の超大国の言葉が国際共通語になることが多く、将来は変わるかもしれませんが、今はとにかく英語ができることが、国際社会に参加する必要条件となっているのです。残念ながら、今はこの現実を受け入れていくしかありません。

次に、日本語にしかない考え方を大切にすべきだという田中さんの意見ですが、これにも基本的に賛成です。賛成ですが、いわゆる「日本語的思考回路」というものを過大評価してはいけないと思います。二つ以上の言葉ができる人なら誰でも分かることですが、一つの言葉で言えることは、たいてい何らかの形でもう一つの言語で言うことができる、という事実があるからです。その意味で日本語だけにあって他の言葉でどうしても表現できない考えが存在するとは私はどうしても思えません。

ただし、ぴったりした表現があるかどうかは、別問題です。たとえば、英語と日本語の場合、何とか訳せますが、ニュアンスがうまく伝わらないことがよくあります。もちろんプロの通訳とか翻訳家となると、それでもうまく表現できるでしょうが、いずれにしても、英語と日本語のそれぞれに、表現しやすいものと表現しにくいもののがあって、どうしてもかみ合わない部分が出てきます。そしてこのかみ合わない部分、つまりなかなか外国語にならない部分にこそ、それぞれの言葉の持ち味、あるいは価値があると思います。こうした違いは、世の中を面白くしてくれるものとして是非大切にしたいものです。

このように、日本語特有の持ち味を大切にすべきだという、今申し上げた意見が、外来語の使用を奨励した先程の話と矛盾しているのではないかとと思われるかもしれませんが、しかし、矛盾はしていないはずで、私が言いたいのは、海外から取り入れるべきものをどんどん取り入れながら、自国の良い文化や言葉も大事にしよう、というだけのことであります。

日本を含め世界の各国は今、急速に進むグローバル化の波にどう対応するかという真剣な問題に直面しています。グローバル化そのものを止めることはもちろんできませんが、そうした状況の中で自らの伝統文化を少しでも残し、民族あるいは国民としてのアイデンティティーを維持しよう、という動きも当然出てきます。

今日お話ししたテーマで言うと、日本国内で今、日本語の在り方に対する関心が高まっているのは、グローバル化に対する反動として理解することができます。日本語をめぐる最近の議論は、一見些細ささいなものですが、実は 21 世紀の日本のあるべき姿とは何かという、とても重要な問題を私たちに示唆してくれています。私個人としては、日本が今後、閉鎖的な姿勢を取ることもなく、また自らの文化を捨てることもなく、バランスよく中間の道を歩み続けられることを期待したいと思います。

では。